様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ００７６１

研究課題名（和文）家庭の養育機能の低下について：保育環境に対する親子間の認識のズレの観点からの検討

研究課題名（英文）Parenting dysfunction in homes: Focusing on the recognition gap between parents and children about the childcare environment

研究代表者
岡野　雅子（OKANO, Masako）

東京福祉大学・保育児童学部・教授

研究者番号：１０１８５４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：養育機能についての認識は「一緒に体験する」「子どもにかかわる」「ルールを守らせる」「規則正しい生活」「父母の協力姿勢」の5つが抽出され、「父母の協力姿勢」は認識と実際の行動の乖離が最も大きかった。世代的な変遷は、子どもにかかわる、規則正しい生活、父母の協力姿勢は増え、自然や地域活動を一緒に体験するは減少していた。次に具体的な場面として「叱られる」「叱る」を取り上げて検討した。叱り方は「暴力的」「威圧的」「無視」に大別され、叱られる側の子どもの「嫌だった」思いは成長後に概して「良い思い出」に好転していた。「威圧的」な叱られ方は良い方向への変化が大きいが、「暴力的」な叱られ方は変化が小さかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子育て中の母親と子育て未経験である学生を比較した結果、母親群は「規則正しい生活」「父母の協力姿勢」をより一層重要であると認識しているが、学生群は重要と認識する項目が分散し曖昧であった。また、わが子への叱り方は、母親群は自分が暴力的な叱られ方をされた場合にのみ関連が認められたが、学生群は将来のわが子には暴力的な叱り方をする割合が高く、手っ取り早い解決を図っていた。したがって、子どもを育てることを通して養育機能についての認識は明確になり、叱られる側の子どもの心情に寄り添うことができるようになるのではないか。このことは「親になること」の重要な一側面であり、児童虐待の防止に対する示唆となると考える。

研究成果の概要（英文）：I initially investigated how nurturing behaviors are recognized. The survey extracted five key factors including "sharing of experiences," "involvement with the child," "encouragement to follow the rules," "keeping regular hours," and "cooperative attitude of parents," with the largest gap between the recognition that parental cooperative attitude should be important and their actual behavior. Another review of generational trends revealed that parent-child participation in nature and community activities outside the home was decreasing. Secondly, I focused on "being scolded" and "scolding" as the event seen around child-rearing behaviors. The method of scolding was largely classified into "violent," "intimidating," and "neglect," and the unpleasant feelings on the part of scolded children generally turned into good memories later in life. It was also shown that scolding a child in intimidating way resulted in greater positive changes, but violent scolding had led to fewer changes.

研究分野：児童学

キーワード：養育機能　家庭　保育環境　親子間のズレ　叱る・叱られる　虐待防止　親であること　子育て支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者は、科学研究費補助金（基盤研究C,課題番号:25350055）を受けて「子どもが捉えた家族･家庭生活：育てられる側からの保育環境の検討と虐待防止への示唆」の研究課題に取り組み、以下の知見を得た（岡野,2017)。①探索的接近として大学生を対象に調査を行い、自分の子どもの頃を振り返って育てられる側から見た人的環境についての自己分析資料により検討した結果、大人とのズレを感じていた者が過半数を占め、ズレを感じていなかった者はわずか 1 割にすぎなかった。②育てる側である子育て中の母親を対象に調査を行った結果、子どもが嬉しいと思う場面については母親は的を射て捉えているが、子どもが嬉しくない（嫌だと思う）場面については必ずしもそうではなく、子どもの心情との間に差異があることが示唆された。

(2) 現代における子どもが育つ環境の中で時間的環境に着目して筆者は研究を行ってきた（岡野,2011)。今日の生活は、直進的で絶えず切り刻まれた時間に拠っていて、我々の行動は自分の内なるものとは別の、自己の外に存在する時間によって律せられているかのようである。しかし、我々の生活の中のすべての時間が外的な時間に追い立てられているわけではなく、それとは異なっていて別の時間の流れの中で“自分が生きている世界”を感じる場合もある。急かされ追い立てられがちな現代の時間的環境は、その中で日々発達している子どもに対しても少なからず影響を及ぼしているのではないだろうか。しつけ方略として「早く、速く」と子どもを急かせる親が近年は多いことが調査から明らかとなっている。昨今の教育改革のキー・ワードの一つに『生きる力』があるが、それは子ども自身が主体的に環境と関わることと深く関係していることを考えるとき、子どもを中心軸に置いて「子どもが生きている世界」を尊重することは、すなわち、子ども自身の視点に立って子どもを取り巻く環境を点検することは、重要な課題であると考える。

2. 研究の目的

(1) 研究Ⅰ：

人間発達の初期である子ども期は、多くの場合に家庭生活の中で家族によって育てられる。しかし、近年では家庭の養育機能は低下していることが指摘されている。幼児期の保育は環境を通して行うものであることから、子どもの健全な発達にとって保育環境を整えることは重要である。従来から保育環境についての検討は保育する側の観点からされており、その研究の蓄積は多い。しかし、保育する側から見た望ましい保育環境は、育てられる側から見たときに適切なものであるのだろうか。

そもそも家庭の養育機能とは何であるのか。そこでまず、養育機能をどのように認識しているのかについて明らかにした。また、子育ては子どもをもつ父親・母親のみが果たすべき責任ではなく、健全な次世代をはぐくむことは社会全体が担うべき責務である。それを勘案したとき、養育機能についての認識は、子育て経験の有無によりどのような違いがあるのだろうか、さらに、世代によりどのような違いがあるのだろうか。これらを明らかにすることが研究Ⅰの目的である。

(2) 研究Ⅱ：

本研究に先行して行った研究から得られた知見として、わが子が嬉しくない（嫌だと思う）場面について親が回答した第 1 位は「叱られる」であった（子どもの回答の第 1 位は「一人ぼっち」、第 2 位が「叱られる」であった)。「叱る」は教育的行為として重要な一つの方法であるが、わが子に虐待を行う親は行き過ぎた「叱る」を行い、それを「しつけ」として認識している事例が多いことが報告されている。そこで、研究Ⅱでは、家庭における養育行動の具体的な場面として「叱られる」「叱る」を取り上げて、叱られる側の子どもの認識と叱る側の親の認識のズレについて明らかにすることが目的である。

(3) これらの研究により、今日の社会的課題である子育ち・子育てに対する支援のためのより良い保育環境の構築に向けて検討するとともに、児童虐待の予防に対する示唆を得たいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究Ⅰ：

方法は質問紙調査法である。調査対象者は幼児の母親 273 名と大学生 335 名の計 608 名である。手続き

は、母親群は北関東の地方都市の幼稚園１園と保育所１か所に在園（所）する幼児の母親であり、各園（所）を通して幼児に調査票を持ち帰らせ、回答記入後に幼児を通して回収した。学生群は北関東の私立 4 年制大学の保育者養成の学科の学生男女であり、授業開始前に調査票を配布し回答記入後にその場で回収した。

質問項目は、平井ら（2015）、池田ら（2012）を参考に、子育てに関する 20 項目を選び、基本的生活習慣のしつけ（4 問）、親子のふれ合い（6 問）、友人・きょうだいとのふれあい（1 問）、社会的生活習慣のしつけ（3 問）、自然体験（1 問）、地域体験（1 問）、文化体験（1 問）、夫婦の会話･協力（3 問）から成る。各問に対して、①どの程度大切であると思うか（認識）、②子どもの頃にどの程度体験したか（体験）、③現在子育てのなかでどの程度行っているか（行動、母親群のみ）について回答を求めた。回答方法は、①は「たいへん大切である」（5 点）～「大切ではない」（1 点）の 5 件法、②③は「いつも行っていた（いつも行う）」（4 点）～「行わなかった（行わない）」（1 点）の 4 件法である。

調査時期は、母親群は 2016 年 11 月、学生群は 2016 年 9 月であった。

(2)　研究Ⅱ：

方法は質問紙調査法である。調査対象者は幼児の母親 255 名と大学生 312 名の計 567 名である。手続きは研究Ⅰと同様である。

質問項目は、①子どもの頃にどのように叱られたか（13 項目）、②その時どう思ったか（13 項目）、いま思い出してどう思うか（13 項目）、③親になったいま(将来親になった時に)わが子にどのような叱り方をしているか(するつもりか)(13 項目)、④わが子に不適切な行動をとる親がいるが、なぜ不適切な行動をとってしまうと思うか(10 項目)から成る。回答方法は、①は「あった、なかった」、②は「とても嫌だった(とても嫌な思い出)」(1 点)～「嬉しかった(良い思い出)」(5 点)の 5 件法、③④は「まったく当てはまらない」(1 点)～「大いに当てはまる」(5 点)の 5 件法である。

調査時期は、母親群は 2017 年 11 月、学生群は 2017 年 9 月であった。

なお、資料収集にあたり、母親対象調査では当該幼稚園・保育所の園長（所長）および教諭・保育士に文書と口頭にて研究の趣旨と内容を説明し、研究協力の承諾を得た。調査票を配布する際には 1 部ずつ封筒に入れ、研究内容の説明文書を同封した。回答後に調査票を提出したことをもって研究協力の承諾を得たと判断した。学生対象調査では口頭にて研究の主旨と内容を説明して研究協力の承認を得た。回答はすべて無記名である。

4．研究成果

(1)　研究Ⅰ：　養育機能に対する認識と行動について

①　養育機能についての認識―子育て経験の有無による比較―

養育行動 20 項目の平均得点は、高い順に「園での様子を子どもが話す時にはしっかりと聴く」、「友だちやきょうだいと遊ぶ」、「近所の人に会った時に挨拶をする」、「友だちと遊んでいる時に約束を守る」、「ご飯の時に家族で会話を楽しむ」などであり、低い項目は「美術館や音楽会に行く」、「海や川で貝をとったり魚を釣ったりする」、「日曜大工など家の人と一緒に物作りをする」であった。したがって、養育行動には様々な側面があるが、親子やきょうだいのふれ合いや社会的生活習慣のしつけについて重要であると認識していることが明らかとなった。また、子育て中の母親群と子育て未経験の学生群の平均得点は 11 項目に統計的有意差が認められ、学生群は「園での様子を子どもが話す時にはしっかりと聴く」、「毎日お風呂に入る」、「友だちと遊んでいる時に約束を守る」、「ご飯の時に家族で会話を楽しむ」、「友だちと遊んでいる時に喧嘩をしたら謝る」、「盆踊りなど地域の祭りや行事に参加する」で高く、母親群は「就寝･起床は平日はほぼ決まった時刻にする」、「毎日の 3 度の食事をほぼ決まった時刻にとる」、「子どもの前で父と母が互いにねぎらう」、「子どもの前で父と母が言い争いをしない」、「子どもの前で父と母が相談したり協力したりする」で高かった。したがって、母親群は「基本的生活習慣」や「夫婦の会話･協力」を重要であるとしているのに対して、学生群は「親子のふれ合い」、「基本的生活習慣」、「社会的生活習慣」、「地域体験」などに分散していて、焦点が曖昧であった。このことから、養育機能についての的確な認識は、子どもを育てることを通して形成されるのではないかと思われる。

② 養育機能に対する母親の認識と行動

20 項目について因子分析を行った結果、第１因子「一緒に体験する」、第２因子「子どもにかかわる」、第３因子「ルールを守らせる」、第４因子「規則正しい生活」、第５因子「父母の協力姿勢」が抽出された。認識得点は、高い順に「ルールを守らせる」、「子どもにかかわる」、「規則正しい生活」、「父母の協力姿勢」、「一緒に体験する」であり、一方、母親が実際に行っている行動（行動得点）は、高い順に「規則正しい生活」、「子どもにかかわる」、「ルールを守らせる」、「父母の協力姿勢」、「一緒に体験する」であった。「父母の協力姿勢」、「一緒に行動する」、「ルールを守らせる」は認識得点が行動得点よりも高いことから、大切であると認識しているものの実際の行動が伴っておらず、認識と行動の間に乖離が認められた。

③ 養育機能についての世代間比較

「母親の子どもの頃（1986 年頃）」、「学生の子どもの頃（2000 年頃）」、「母親の現在（2016 年）」の 3 群の比較を行った結果、日々の生活のなかで親子がかかわり、規則正しくルーチン活動を行い、父親と母親が協力する姿勢を示すことは、この約 30 年間で増えているが、家庭外での自然や地域の活動に親子で参加することは減少していることが明らかとなった。育てる世代が多忙化していることや、自然や地域とふれあう機会が減少しているという社会背景の影響があると考えられる。したがって、養育機能は各家庭における日々の暮らしの有り様に依存する割合がより一層大きくなっているようであり、家庭の養育が家庭内のいわば閉じた世界で行われるようになっている傾向を示唆しているのではないだろうか。

④ 養育行動低得点群の母親の特性－児童虐待防止への示唆－

母親の養育行動の回答について平均値より著しく低い場合を抽出して、その特性を明らかにした。5 つの側面中 3 つ以上の側面が低得点であった 19 名（回答者の 7%）について検討した結果、「子どもにかかわる」、「規則正しい生活」は低得点群も非低得点群も認識と行動の隔たりはほとんど認められないが、「ルールを守らせる」は低得点群で差が大きく、したがって行動が伴っていない様子がうかがえた。「一緒に体験する」、「父母の協力姿勢」は両群とも認識と行動の差が大きいが、低得点群はその隔たりが非低得点群よりもさらに大きく、認識はしていても行動は伴っていない程度が大きいといえる。

(2) 研究Ⅱ： 「叱られる」「叱る」に対する親子間の認識のズレについて

① 「叱られる」「叱る」に対する親子間の認識のズレ

子どもの頃の叱られ方の 13 項目の中で「あり」が最多の項目は「怖い顔をされた」(88.2%)で、「怒鳴られた」、「手で叩かれた」、「外に出された」が過半数を占め、「お説教をされた」、「口をきいてくれなかった」、「話を聞いてくれなかった」は 4 割を超えていた。因子分析の結果、第 1 因子「暴力的」、第 2 因子「威圧的」、第 3 因子「無視」が抽出された。叱られた時の思いは「外に出された」が「嫌だった」思いが強く、「お説教をされた」、「押入に入れられた」、「怒鳴られた」と続く。いま振り返ると「物で叩かれた」が「嫌な思い出」が強く、「足でけられた」、「食事を抜かれた」と続く。すべての叱られ方は「いまの思い」が「その時の思い」を上回り、良い方に変化していた。「いま」と「その時」の差は、「暴力的」(0.79)、「威圧的」(2.30)、「無視」(1.19)で、暴力的な叱られ方は「いま」と「その時」で差が小さく、したがって変化は小さく、一方、威圧的な叱られ方は「いま」は「良い思い出」に大きく変化していた。

母親群のいまわが子に対する叱り方の平均値は「怖い顔をする」が高く「大いに当てはまる」「当てはまる」が９割を占め、「怒鳴る」、「しつこくお説教をする」と続く。母親自身の子どもの頃の叱られ方といまわが子への叱り方の関連は「暴力的に叱られた」と「暴力的に叱る」($p<.05$)、「暴力的に叱られた」と「威圧的に叱る」($p<.01$)、「威圧的に叱られた」と「威圧的に叱る」($p<.01$)、「無視されて叱られた」と「無視して叱る」($p<.01$）で関連が認められた。したがって、わが子への叱り方は自分が子どもの頃に叱られたように叱っていることが明らかとなった。

② 「叱られる」「叱る」についての子育て経験の有無による比較

子どもの頃の叱られ方は、子育て中の母親群と子育て未経験の学生群でともに1～3 位は同じで「怖い顔をされた」、「怒鳴られた」、「手で叩かれた」であった。叱られた時の「嫌だった」程度は「押入に入れられた」、「外に出された」、「口をきいてくれなかった」、「しつこくお説教された」、「物で叩かれた」で強いが、全項目について両群間に統計的有意差は認められなかった。いま「嫌な思い出」の程度は「物で叩かれた」、「足で蹴られた」、「話を聞いてくれなかった」で強いが、全項目について両群間に統計的有意差は認められなかった。

叱られ方の「暴力的」「威圧的」「無視」の3群とわが子への叱り方の3群の間には、強い関連が認められた。母親群は子どもの頃に暴力的な叱られ方をされた場合にわが子に対して暴力的な叱り方と威圧的な叱り方に関連が認められたが、学生群ではどのような叱られ方をされてもわが子に対しては暴力的な叱り方をする（であろう）と関連が認められた。したがって、学生群は手っ取り早く暴力的な叱り方を選択しがちであるが、母親は叱られる側の子どもの「思い」を想像する姿勢をもっていることが推測され、子どもの心情に寄り添うことができるのではないだろうか。このことは「親になること」の重要な一側面であると考えられるだろう。

＜引用文献＞

平井美佳・神前裕子・長谷川麻衣・髙橋惠子（2015）：乳幼児にとって必須な養育環境とは何か：市民の素朴信念．発達心理学研究 26(1)，56-69.

池田まさみ・安藤玲子・宮本康司（2012）：第6章幼児期の問題行動と家庭力．In:菅原ますみ（編），子どもの養育環境と QOL　お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム　格差センシティブな人間発達科学の創成1巻．金子書房，東京，pp101-117.

岡野雅子（2011）：現代の時間的環境における保育に関する研究．風間書房，東京，252p.

岡野雅子（2017）：子どもは家族とのかかわりをどのように捉えているか？―母親の捉えとのズレに着目して―．日本家政学会誌，68，2，49～59.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 岡野雅子	４．巻 9巻
２．論文標題 家庭における養育機能についての世代間比較	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京福祉大学・大学院紀要	６．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 家庭の子育て機能についての認識（第3報）－「叱られる」「叱る」についての子育て経験の有無による比較－
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masako OKANO
２．発表標題 Awareness of parents being inappropriately involved with children in Japan: Comparison between having and not having experience of raising children
３．学会等名 The 20 Biennnial International Congress ARAHE（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 「家庭における養育機能」調査から見た児童虐待防止への示唆－低得点群に着目して－
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 母親自身の「叱られた」「叱る」と児童虐待に対する認識の関連
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 家庭の子育て機能についての認識－子育て経験の有無による比較－
３．学会等名 日本保育学会第70回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masako OKANO
２．発表標題 Recognition of Japanese mothers regarding the raising of children at home and their actions
３．学会等名 19th ARAHE Biennial International Congress（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 家庭における養育機能について－世代による比較－
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡野雅子
２．発表標題 家庭の子育て機能についての認識(第2報）－「叱られること」「叱ること」についての親子の捉え方のズレ－
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考